

随 想

私の地理学人生で考えたこと

井 出 策 夫

地図への関心

平成13年12月19日に古希を迎えた私は、平成14年3月末をもって立正大学を定年退職した。33年間の勤務である。一世代30年というから、立正大学には一世代在籍していたことになる。昭和29年3月大学を卒業して教職(中学校教諭)に就いてからは約半世紀になる。杜甫の時代には「人生70古来稀なり」だろうが、今では平均寿命にも満たない。それにしても一世代とか、半世紀という時間は人の一生にとっては随分長く、歴史的時間である。

考えてみると、私の生まれた昭和6年は満州事変が勃発したした年である。羽田空港が完成し、一番機が大阪へ向けて離陸したのはこの年の8月25日である。ニューヨークのエンパイアステートビルが完成したのは5月1日である。また、豚の肉にパン粉をつけて油で揚げるカツレツを、「トンカツ」と称して売り出したのは、東京・上野の「楽天」という店で、この年の10月のことだという(昭和・平成家庭史、河出書房新社 p. 37)。この年から私の歴史が始まり、いろいろな時代の息吹を体験してきたわけである。

小学校は、尋常小学校に入り、国民学校を卒業した。4年生の時(昭和16年12月8日)に太平洋戦争(当時は大東亜戦争と称していた)が始まり、緒戦は「鬼畜米英」を相手の赫々たる戦果に胸躍らせた日々であった。机の前の壁に貼った世界地図は、その頃わが家とっていた毎日新聞の店がくれたもので、「大東亜共栄圏」を点線で囲ってある地図で、それに自分でつくった小さな日の丸の旗を貼って戦果のあとをたどったものである。赤い色で塗られていた当時の大日本帝国の版図は、朝鮮半島、台湾、樺太(サハリン)の南半分、千島列島が含まれ、それに日の丸の小旗の占領地域が毎日ひろがる様は、幼心をときめかし国土の拡大を単純に喜んだ。どうやらこの体験が、私の地図というものに対する最初の認識であり、地理への素朴な興味の始まりであったようだ。英国の植民地であったシンガポールを占領し、昭南島と名付けたのは昭和17年2月のことであった。シンガポールが赤道直下にあるということもこの時に知った。戦前・戦

中に少年期を過ごし、教育勅語をそらんじている世代には、多かれ少なかれ戦時体験が身体に刷り込まれ、「少国民」感覚が眠っているように思える。

地理部への入部

終戦は疎開先の静岡県富士宮(当時は富士郡上野村)で知った。東京へ帰れたのは翌年1月(昭和21年)のことであった。私は昭和19年に入学した中学(都立十五中)2年の4月から、母親の郷里である上野村へ疎開し、県立富士中学に転校した。転校生に対するいじめは今も昔も変わらないが、私も転校したその日からその洗礼を受け、下駄箱に入れておいたズック靴が下校時に刃物でずたずたに切られていたのである。もちろん犯人は分らずじまいだが、以来それまで漠然とイメージしていた、農村は自然に恵まれ、農民は純朴であるという思いが一転し、人間集団としての社会には、農村も都会も違いはないのだということを悟った。それだけに、一日も早く東京に帰りたと思ったが、戦争直後は東京への転入制限があり、帰京までに半年を要した。

戻った学校の元の校舎は戦禍でなくなっており、現在の明治神宮野球場の道路をへだてたところにあった近衛四連隊東部第七部隊の兵舎跡が校舎であった。この中学校は昭和23年4月から学制改革によって、新制度の都立青山高校となったわけで、私はその時旧制の中学4年であった。したがっていきなり高校2年に移行したので、今の学校制度からいえば、私は中学校を卒業せず、高校生活は2年間しか送ってないということになる。

それはともかく、戦後の学校はなにもかも大きく変わり、それまで剣道部と柔道部しかなかったクラブ活動もさかんになり、生徒の自治活動が許されるようになった。そうしたなかで、ある日「地理部員募集」という掲示が生徒会の掲示板に出ているのをみて、何げなく指定された教室を覗いたのが、私と地理学との関わりの始まりである。とくに「巡検」が私に実利的興味をもたらし、地理学との縁を深くしたように思う。「巡検」という言葉が海軍の軍隊用語だったということはこの頃聞いたのだが、地理部での最初の巡検は神奈川県秦野盆地であっ

た。今では人口16万の都市となっている秦野市も、当時は駅前を除きまだ畑の中にわらぶき屋根の農家が点在する、純然たる農村であった。畑の作物は世情を反映して、さつまいもがほとんどであったように覚えている。秦野で何を勉強したのかはよく覚えていないが、一番印象的だったのは、ある農家を訪問し何人かの部員と一緒に聞き取り調査まがいのことをしたとき、その家でふかしいもを皿いっぱい出してくれたことである。食料不足でいつも空腹をかかえていた高校生にとって、この時のさつまいもは今でも忘れがたい思い出である。「巡検に行つてさつまいもを喰った」という思い出は大学で地理を専攻しようと決めた大きな動機であるといえる。ちなみにこの地理部からは私の2年先輩で後年、国土地理院院長になり、立正大学にも非常勤講師で出講された金窪敏知氏や、同期で歴史地理学を専攻し、奈良女子大教授で早逝した故山澄元君らの地理学者が出ている。

フィールド・ノート

長いことフィールドワークを続けてくると、その間に使ったフィールド・ノートの数も増える。私は原則としてフィールド・ノートは同じコクヨのSKETCH BOOK (9.5cm x 16.5cm) を使用してきた。この間冊数を数えてみたらざっと150冊を超えていた。これには個人研究のほかに、野外実習や巡検その他で出かけたものも含まれているから、この数が全体として多いのか、少ないのかは分からないが、ノートの背に貼ったラベルに書かれた年月と地名は私のフィールドワーク記録として懐かしい。私は同じフィールドは、同一のノートを使うようにしてきたので、ノートの数からフィールドとそこへ出かけた回数を知ることが出来る。一番多かったのは、諏訪地方である。

立正大学に勤めてからの最初の「野外実習」も、昭和43年6月30日～7月3日の諏訪地方であった。それ以来同じ旅館(高浜温泉旅館)に宿泊し、諏訪地方を訪れたの40数回におよぶ。宿舎の旅館は昭和初期に建てられた湖畔の古い旅館で、廊下をあるくとギシギシと音がするような旅館であった。窓を開けると目に前はすぐ湖であるが、湖水はアオコによって青く淀み、うんか(ユスリ科)が大量に発生するような状態であった。それ以後諏訪の野外実習はずっとこの旅館を利用してきた。いつの間にか旅館と諏訪湖の間は埋め立てが行われ、道路(20号線のバイパス)ができ、ゲートボール場ができてしまつた。

諏訪地方が、近代日本の産業発展を推進した最大の製糸業地であったことは言うまでもないことであるが、製糸業衰退後は軍需工場の疎開先となり、戦後はいち早く「東洋のスイス」として時計・カメラを中心とした精密工業地域となり、さらに昭和37年からは新産都市として工業地域としてのあゆみを進めてきた。諏訪地方の野外実習や巡検は、私の研究分野である「工業地域」と関連して地域選定したわけである。それだけに巡検で訪問する先は工場が多くなる。最初の野外実習の時も、精工舎(現エプソン)やオリンパス光学、ヤシカカメラ(倒産し現在は京セラが引き継ぐ)やダイヤ豆腐(凍り豆腐)、中央印刷、養命酒(ともに製糸工場の跡地利用)などを訪ねている。その後諏訪の巡検の度にこれらの工場は訪れ、度毎に工場の方々のお世話になった。しかし、その間工場の製品が変わり建物も機械も変わってきた。フィールド・ノートにはその都度の記録があり、地域変化の経過をたどることができる。一種の定点観測の記録でもあろう。「葦の随から天井のぞく」という「群盲象をなでる」ような理解であるが、「諏訪の盆地から日本産業をのぞく」つもりであった。

そろばん時代からパソコン時代

地理学を志して50年、その間調査や研究の仕方も随分変わった。今では統計数値の計算や処理はパソコンで簡単に計算し、表やグラフに表すことが出来る。学生のレポート一つをとってみても、ワープロで清書され、カラーのグラフなどが挿入された文書を見ると、一見して体裁良く、なかなか良くできているレポートのように思える。ところが中身を読んでも内容空疎で、思考のあとが感じられないものがよくある。格好や調子ばかり良く中身がないのは、レポートだけでなく学生にも時々見かける。それはさておきパソコンがなかった時代には、数を足したり引いたり、掛けたり割ったりするのも大変で、ソロバンが苦手な私はよく筆算でやったものだ。それだけにずいぶん余計な時間を使ったと思う。手回しの計算機を使えるようになると掛け算や割り算は驚くほど速くできるようになり、電子計算機ではそれが一層加速した。計算が簡単にしかも迅速に出来るようになると、いろいろな地域の統計数値を加工し、それによって地域特性を表現する論文が増えたように思える。つまり、計算の道具が変わったことによって同じ「地の理」の表現形態に変化が現れたように思う。

かつて「東京の工場分布図」を作成した(「東京にお

ける工場の分布」：地理評35 - 9、共、で発表)。これは各工場を業種(中分類)、規模(従業者数)別に1点1工場、5万分の1地形図にプロットしたのであるが、何しろ4万近い工場(従業者4人以上)をなるべく正確に1工場ずつプロットする作業は気の遠くなる仕事であった。地形図は10枚を張り合わせた大きさになる。まず名簿は「工場通覧」であるが、この名簿を一枚一枚カード(株日本カードに特注したもので、工場名・所在地・業種・従業者数・創業年などを記入し、地区別・業種別・規模別・創業年時別などに分類し、ソート出来るように設計したパンチカードを5万枚発注した)に転記する作業から始めた。幸い板倉勝高(故人)、竹内淳彦、北村嘉行氏らとの共同研究であったから手分けをし、アルバイトを使って作業することが出来たのである。つぎに1枚1枚のカードを地図にプロットするのであるが、地形図では町丁名や番地は分からない。そこで都市区分図と照合しつつ工場所在地を探し、プロットしたものである。このような愚直な作業で分布図をつくったのであるが、その頃この共同研究をした板倉・竹内・北村氏に私を含め全員が、中高の教員をしていた時代である。それぞれが本業の間をぬって愚直な作業を続け、「東京の工場分布図」が完成するのに1年近くかかった。しかし、この愚直な作業のおかげで、東京の工業がどのような分布特性を持っているか、いまだに明確に頭の中に残っている。そして、私の工業地理学研究の原点もここにあるように思う。当時の仲間はその後、板倉氏は信州大学から流通経済大学を経て、東北大学へと移り、定年退職後故人となられた。竹内氏は日本工業大学で、北村氏は東洋大学でそれぞれ工業地理学の研究者として活躍されているのは周知のことである。私の研究者生活の中でこの愚直な作業仲間は、生涯忘れがたい知友である。

「東京の工場分布図」のことを綴ったのは、懐旧の情を記すためではない。今の時代であれば、名簿の整理・分類や分布図作成の方法も、もっと能率的な方法がある。それはそれでよいことであるが、愚直な手作業をやったおかげで、一つの工場をプロットする時も、場所・地形・周辺の状況・他の工場との関係などを考えながら点を打っていくため「分布」の意味を思考しながら作業を進めているのである。出来上がった地図を見て「これから何が分かるか」というより、地図をつくる過程から

「土地の上に何が、何故あるのだろう」と考えながら地図を読んでいく方が、より深く地図を読めるのではないだろうか。研究の便利さが、時には思考の浅さにならなければよいと思う。

歴史が刻まれた土地

以前「土地に刻まれた歴史」という本があった(古島敏雄、1967、岩波新書)。これは農業経済学を専攻し、産業史、経済史に関する多くの研究をされた古島氏が、変貌する国土景観を、人が土地に働きかける、生きる営みの結果であると捉え条里制の遺構や開墾・開拓の歴史を語っている本である。経済史家である氏が、土地の上に歴史を見るならば、地域を対象とする地理屋は土地を「歴史が刻まれた土地(地域)」と考え、今日の地域の姿に過去の人々の暮らしを思うことが大切であろう。

人の心の「^{ことわり}理」が心理学ならば、地理学は「^{ことわり}地の理」であると文字面からいえる。だから「^{ことわり}理」として、「人はこの土地で何故このようなくらしをするのだろうか」ということを考えることになる。つまり、土地利用の^{ことわり}理である。人のくらしはつねに「くらしやすさ」を求めているのではないだろうか。いいかえれば、合理性と効率性の追求ということになる。土地利用の研究もその合理性の意味を考えることである。

よく歴史の一回性という。歴史は一回しか起こらないというのである。それに対して地理は一所性という。一つの土地は、同時には一つの事柄でしか利用できないということである。その一つの事柄というのは、その時の人々が最も有効だと思う事柄、あるいは最高の価値と考える事柄なのだろう。つまり土地はつねに「最高の地代で占拠される」わけで、土地利用の変化はそれぞれの時代の「最高の地代の選択」ということになる。

人々は連綿と土地の上で生き続ける。だから現在の地域の姿は過去の人々の「自然に対する労働投下の結果」なのである。われわれは歴史と空間の接点に生きている。その生きている空間のことを考えるとき、時に過去を振り返り「労働投下の過程」を考えることが必要なのではないだろうか。「温故知新」を思う気持ちは、地理学を学んでここまで来た私の今日このごろの気分である。